

第7号 華山会報

平成13年10月11日
財団法人華山会

明治時代活字になった華山読みもの

小澤 耕 一

明治の世に出版された渡辺華山に関する読みものは四種ある。

第一番は明治十七年（一八八四）九月に発行された『文明東漸史』である。著者の藤田茂吉は号を鳴鶴と云い報知新聞の記者であった。本書は内編と外編とより成り、内編は鎖国日本へ蘭学や西洋文化の伝播を記し、外編は渡辺登及び高野長英の伝記が記されている。

二番目は明治三十九年（一九〇六）八月四日発行の『竹田と華山』である。著者の兼松亀吉郎は尾張藩の旧臣で号を芦門と称し、元治元年（一八六四）生まれ名古屋に住んでいた。彼は自らも南画を嗜み、遠く大分長崎迄も調査紀行し、江戸で活躍した華山と関西が舞台である田能村竹田（一七七七―一八三五）とは、同時代に生きながら相見えざる二人の武家画人の論説を展開している。

三番目は明治四十一年（一九〇八）二月二十三日に前編を同年七月七日に後編を東京弘文書院より発行した碧瑠璃園著『渡辺華山』である。これは前年に東京日日新聞へ連載して当時の大衆から好評を博した小説であるが内容は善玉悪玉入り乱れての講談通俗フィクション小説になっている。碧瑠璃園は本名を渡辺勝（一八六四―一九二六）と云い名古屋の出生である。他に露亭・黒法師の別号がある。岐阜日日新聞社を振り出しに大阪朝日新聞社（兼東京日日新聞社）に入社し、縦横無尽の活躍で著作千編以上に及び、一躍文壇の巨匠にのし上がった。このフィクション小説には、前編に文部大臣男爵牧野伸顯・文学博士子爵末松謙澄・学士会院長・博士男爵加藤弘之の序文が付き、前学習院教授兼女子部長下田歌子の題詠「思ひきや作りし華の山かげにまことの道のしをり見んとは」が寄せられた。後編には伯爵大隈重信・前外務大臣加藤高明の序文が付き、枢密顧問官男爵高崎正風の題詠「君臣につかふる名こそかはりけれまことをつくすみちはひとすじ」が寄せられている。明治四十一年三月十二日、この本は宮内大臣田中光顕を通して何んと明治天皇の天覧となった。



四番目は明治四十二年（一九〇九）七月二十八日東京弘文書院発行の土井禮著『華山研究』である。土井は渥美町堀切の出身で、郡役所に入り渥美郡視学・田原町長を経て、名古屋に第八高等学校（現名古屋大学）が開校されると同時に主事として勤務した。その余暇に華山研究に没頭し、同書以外にも『華山先生全楽主義』を雑誌『日本及び日本人』その他全楽主義強調の論文を諸誌に発表した。彼は昭和七年（一九三二）二月に名古屋の自宅で病死した。六十七歳であった。



東京三宅坂（最高裁判所前）華山生誕の地

のぼり学習と華山先生

田原町立田原中部小学校長

藤城精一

平成十四年度から、小学校、中学校及び高等学校において、「総合的な学習」の時間が創設される。

これは、従来の教科、道徳、特別活動の外に新たに設けられる学習であり、文部科学省は、この総合的な学習の時間の指導のねらいとして、次のようなことを掲げている。

自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること

学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること

ア 例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題

イ 児童の興味・関心に基づく課題
ウ 地域や学校の特色に応じた課題
などが示されている。

本校では、渡辺華山先生を学習活動のウの中の一つの単元として取り上げることにした。

華山先生は、郷土の偉人、幕末の先覚者として現在もお顕彰されている人物であり、本校の長い教育活動の歴史の中で、次に掲げるように随所に取り入れられている。

正門左には立志の像、その横には、「見よや春 大地も亨す地 蟲さへ」の石碑があり、また、運動面・文化面で活躍した児童には学期末ごとに立志の像メダルが授与され、卒業式の後には、立志の像の前で立志式が行われる

教室の正面掲示板には、華山先生の肖像画が掲示されている
「人間華山先生を したつ学風美しい 田原中部小学校」と校歌の一節にも歌われている
玄関には、華山先生の遺訓が額の中に掲げられている

昭和の初期より永々と引き継がれてきた「立志」「板橋の別れ」の二つの華山劇が上演されているこの学習の時間の名称を、本校では、「のぼり学習」とした。

これは、華山先生の登、向上心や上昇、風を受けて元気よくはためく幟等々の意味を勘案して付けた。

この「のぼり学習」を通して、本校の児童が華山先生の人間性、生き様、業績を探究していく中で、人間としての生き方を真剣に考えていくことができるようになることを期待している。



目次

題字「華山会報」華山会理事	小澤耕一
明治時代活字になった華山読みもの	小澤耕一
田原町立田原中部小学校長 目次	
画家渡辺華山の心象	『溪澗野雉図』
退役願書之稿 (3)	
華山・史学研究会だより	
高野長英記念館	
華山の書 『守字解』	
紀行文『游相日記』 (5)	
各地の美術館を訪ねて	「山形美術館」
華山と私	
田原の有名人渡辺華山先生	野田小学校児童
田原町博物館から「案内	

画家渡辺華山の心象

山形県指定文化財

渡辺華山筆溪澗野雉図

天保十二年（一八四一）

絹本着色

縦一四二・〇cm 横八六・〇cm

山形美術館蔵長谷川コレクション

魚の泳ぐ清らかな溪流で今まさに水を飲もうとする雄の雉子を中心に、岩上に躑躅の花が咲き、薄紫の房が垂れる藤の枝、雄の雉子を見守る雌の姿が描かれます。原画は幕府の医官曲直瀬家所蔵で、中国明代の大家呉維翰によるもので、構図をやや変えて、模写したものとされています。図中の款記に「丁酉四月製華山邊登」とあり、白文長方印の「華山」を捺していますが、図中に描かれる鳥や魚は、華山が田原塾居中に描いた『翎毛虫魚冊』内のス

ケツチを元にしての指摘もあり、その写実力や画面全体に広がる清冽な気から、やはり最晩年に描かれた華山花鳥画の代表作に位置付けたいと思います。

また、この作品には、第二次世界大戦前の所蔵者による伝来書や譲り状が付属しています。その譲り状の記述によれば、この作品は遠江国（現在の静岡県西部）の明昭寺の水

雲和尚が、華山門下の友人を通じて、寺の什宝にふさわしい作品を描いてもらった。明治維新後、同寺の蔵品を整理することを伝え聞いた掛川の薬種商古沢多賀蔵が購入し、数年後、東京日本橋に住む華山の息子渡辺小華の世話で、京橋の酒問屋の説田家に売却された。当時、「説田の水呑み雉子か水呑み雉子の説田か」と評判になったという。説田氏没後、昭

和九年に貴族院議員の小坂順造が入手し、同十六年、東京の美術商本山竹荘の手に渡った。二年後には、山形の金融界で活躍をしていた長谷川家の蔵品となった。また、付属資料として、『溪澗野雉図』の縮図が所載されている椿椿山筆の『足利遊記』があります。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌



退役願書之稿(二)

今回紹介する部分には、田原町民の多くが知っている華山の句「見よや春大地も亨す地虫さへ」が登場します。この句を刻んだ碑は、私の知る限り、城宝寺、田原中部小学校の校門、田原中学校の校門と三箇所もあります。田原中学校の玄関には、この句が拡大して額に入っています。さらに、学校の卒業式の祝辞では、必ずといってよいほど、この句が引用されます。偏った見方かもしれませんが、これは、この句に込められた華山の心情に現代に通じるものがあり、多くの人が共感する名句である証拠だと思います。

私事になりますが、田原中部小学校児童として、講堂にあった「立志の像」を、ことあるごとに目にしてきた私には、妙に、この句と立志の像が重なってしまいます。『退役願書之稿』を読めば、立志の時とこの句を詠んだ時が違ふことは分かります。

しかし、小学生の時から、恩師によるこの句の説明を受け、「冬は暗くて寒い。しかし、いつかは春が来る。明るく温かい春が来さえすれば、地

面の下で冬眠する虫でさえ、地面をつきやぶり地表に出ることができる。虫にできることが、人間である自分にできないことはない。今に見ている。俺だって、いつか地面をつきやぶってみせる。いや、春にしてやる。」と勝手に解釈していた私には、どうしても立志の時にこの句を詠んだ方がドラマチックであり、立志の時の心情を表していると思えてしかたがありませんでした。

「見よや春」の句碑(城宝寺)
詳細は、会報第一号参照



五 藩内の様子

そのころは、藩内の風儀があまりよくありませんでした。心得のよくない者が若者頭になり(柳原伊右衛門などです)、勤番者に勧めて遊所通いをさせ、また職務のある者は、藩公の威光を借りて上下をほしいままにし(黙庵様の時代のことです)、藩の奥向きの仕事は、管理していない状態でした。また、ある者は、古道具の世話をしたり、ある者は、縁談の紹介を内職としたりするありさまでした。さらに、金銭の取締りをする役目の者は奢侈になり、家中の者が申し合わせ、強引な願い事をしたり、歌・三味線の稽古をしたり(私もこの仲間に入れられたことがあります)、あげくの果ては出奔する者や休暇をとる者が出てきました。つまるところ、藩政がゆるみ、藩財政が窮乏したので、家中の者がどのようにしても勤めさえすればよいということになったと思います。こうなったので、上役の者たちが、おどしたりすかしたりして、下の者を扱っようになりました。こうなってしまう、まことに嘆かわしいことです。

前節の金子金陵への入門が、華山十七歳の時なので、文化六年(一八〇九)頃と思われる

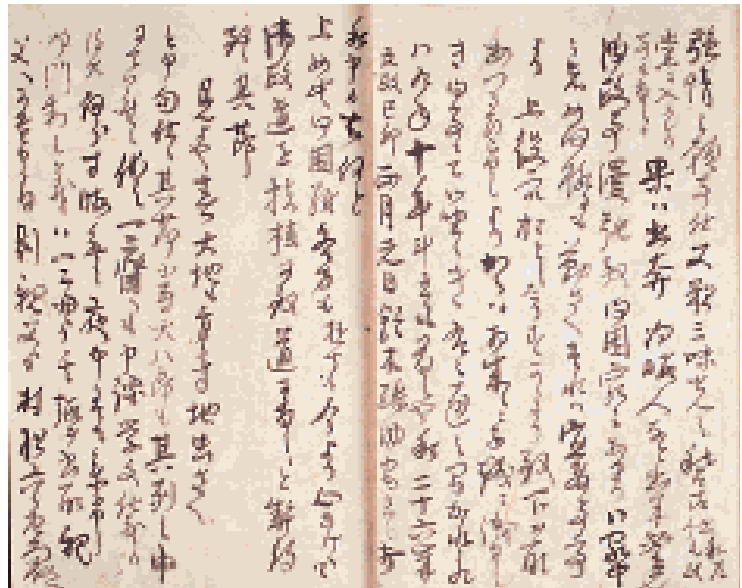
る。後出の「黙庵様御代也」や次節の「かれこれ八、九年、十年ばかり」という記述と合致する。華山は、十六歳から、隔日の奉公になった（前々回参照）ので、藩内の様子を詳しく知ることができたと思われる。

十一代藩主三宅康友一七六四〜一八〇九のこと。

原文は、『出奔、御暇人』で、『出奔』から解釈すると、『御暇人』は、今で言う辞職と解釈した方がよいかもされないが、私の考えでは、弛緩している藩政の中では、辞職よりもサボタージュをとるのではないかと思う。こうした方が、次の『如何様にも勤さへすれば宜敷』と合致する。今のところ、当時の藩士の様子が分からないので、御高説を待つ。

六 藩内刷新計画

こういう状態がかれこれ八、九年、十年ばかりも続いたでしょうか。私が二十六歳・文政己卯の正月元日のことです。鈴木孫助の家に、うちうちの者が寄り合って相談することがありました。その時、私は次のように言いました。「殿様がこのように困難しています。みなさんも



私も、今から心がければ、政道を助ける方法があるはずです。」

このことをお互いに約束しました。その節、

見よや春大地も亨す地虫さへ

という句を詠みました。この時、小寺大八郎もその仲間のなかにいました。

華山二十六歳は、文政元年（一八一八）、

つまり、文政戊寅。文政己卯は、文政二年、

華山二十七歳。

こういうことから佐藤一斎先生に相談しました。「学問をしたいのですが、なにぶん寸暇もないので、夜教えを乞うかがいたいのですが、よろしいでしょうか。」

門限のことについては、一斎先生にその趣旨を書いていたとき、私の父に渡していただくことにしました。私の父が、村松六郎左衛門殿に夜の門限のことをお願いしたところ、六郎左衛門殿から、

「儒者でないのに、門限のことを申し出られたが、それは難しいことです。」

という返事がありました。そのため、せっかくの志がくじけてしまいました。つくづく次のことを考えました。

「上にしては君に忠を尽くし、下にしては親に孝を尽くす、ということとは、みな学問をする中から生じることである。ましてや君に忠を尽くすことは、無学無術ではかなわない。かくなるうえは、いよいよ絵をかくことを主にし、貧を助けて、少しでも親を安心させたいものだ。」

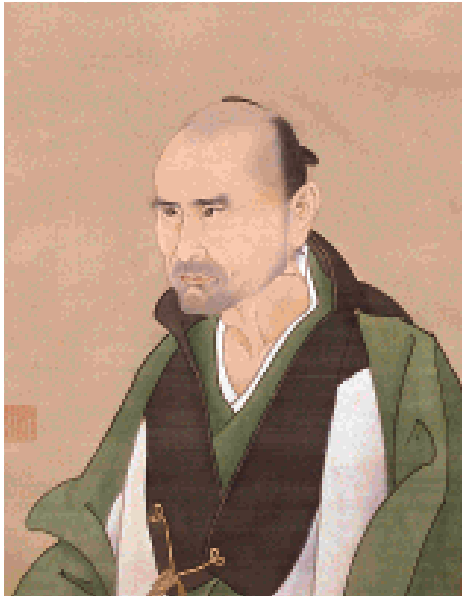
このことから、さらに、次のことを考えました。「一生つとめを続けようとは思わない。とりあえず親の貧を助け、ゆくゆくは、天下第一の画家になろう。」

この一事に思いを定めました。こうなれば、こ

奉公しては、このようなことはできないと思
い、内々に親に家督を相続しないことを願いま
したが、もつてのほかのことであると諭されてし
まいました。

文化八年（一八一）に、鷹見星臯が逝去
したので、華山は、星臯の一番弟子の佐藤一
斎に入門する。江戸時代、幕府は、朱子学を
官学として採用していた。一斎は、幕府の昌
平坂学問所の儒官であるが、陽明学右派の立
場をとったので、「陽朱陰王」と言われる。
そして、華山の思想に最も影響を与えたのが、
一斎である。本稿とは直接関係ないが、朱子
学と陽明学について、次号で詳しく紹介した
い。

佐藤一斎画稿（渡辺華山筆）



七 出奔計画

いくら親に諭されても、一度思い立ったことは
捨てがたく、

「とてもこのような状態では、生活の足しになる
ような絵はかけず、ましてや天下第一の絵描きにな
ることさえできない。何も眼前の小さな孝を尽
くさずとも、昔の人が遊学した例にならつて、田
原を離れ、他の国で学問をした方が、後々親に孝
行を尽くすことができるではないか。根本におい
ては、それほど間違つたことでもないであらう。」
と考え、密かに長崎に出奔する思いがわいてきま
した。出奔の時の書置きのためかと思ひ、つまら
ない詩を作り、日記に書いておきましたので、左
に書いてご覧いただきます。お笑ください。

嗤ふなかれ鷓鴣の鵬雲を試むるを

決起して楡を捨き初めて分を見る

游子固より知る風木の歎き

花朝月夕何ぞ君を忘れん

『莫嗚鷓鴣試鵬雲』

決起捨楡初見分

游子固知風木歎

花朝月夕何忘君』



鵬雲賞授賞式（田原中学校）

この時の華山の決意にちなんで、田原中
校では、年二回、個人の努力および成果が他
の模範となる生徒に対して、「鵬雲賞」とし
てメダルとともに表彰している。同校では、
鵬雲を、「天下一の画家になろうとの大志を
鵬が空高く舞い上がる様子をたとえて表現さ
れたことば」としている。

（続）

研究会員 柴田雅芳

華山・史学研究会だより

研修旅行

高野長英記念館
水沢市巾上野町

本年度の華山史学研究会の研修旅行は東北岩手の水沢市にある「高野長英記念館」へと遠出した。

「高野長英記念館」は水沢市内の総合公園の一隅の閑静な林の中にあり、目立たないが、落ち着いたたたずまいの記念館である。白壁に煉瓦色の瓦を載せた前庭の垣を過ぎると、先ず右手に長英を顕彰する大きな顕彰碑があり、碑面にびっしりと漢文にて長英の功績が記されていた。

館長の佐藤章氏に導かれて館に入ると、館内には長英の系譜をはじめ、おびただしい長英の関係資料が陳列棚に並んでいた。

建物は鉄筋コンクリート一階の平屋造り。展示室は玄関を入った直ぐのこの展示室のみであるが、長英関係の系譜・鳴滝塾関係・洋学書の書写資料・長英自身の翻訳資料・そし

て、有名な「夢物語」などの原稿をはじめ、逃亡中に家族や友人に宛てた手紙などがやや手狭に感じさせるほどに並んでいて圧巻であった。

又、壁面には、長英の肖像画や書が掛けられていて、その一つ一つが蘭学者長英の人となりや才能を彷彿とさせ、じっくりと一つ一つを時間を掛けて眺めるゆとりがないのが残念に思われた。

特に、渡辺華山との関わりを直接示す展示資料としては、第一に椿椿山作の高野長英像がある。この像は縦およそ六十cm、横四十cm位の掛け軸に、やせて頬のこけた面立ちで、何か思案に暮れるかのようにやや顔を傾けて、ひよろりと座っている像である。館長さんの説明によると、これが発見された時、子孫の方の一人はこれは長英ではないと主張されたそうであるが、長英が直接関わった人の作としては、これが唯一のものである。この像の横にはどつしりと落ち着いた長英像（明治以後の人の作）が二点並んでいたが、やはり

椿椿山作の高野長英像を見慣れた私にとっては、こちらの方がはるかに逃亡者長英が彷彿とされ面白かった。

今一つ華山との関連が示されている資料としては、長英と華山が田原長興寺で詠じあったとされる篆書の七言誌の掛け軸が二幅ある。天保五年にこれを詠んだということになっているが、果たして長英がこの年に長興寺を訪れたと言う事実があったのかどうか、大変興味を持たれた。

この他にも、同じく掛け軸で「蘭亭序」を記した大きな長英の書があった。これには、田原の熊野尾甚十郎なる者から丹羽氏へ贈られたものという事で、田原との関わりを思わせる資料として又関心が持たれた。

なお、これらの資料の殆どが後藤新平（長英とは叔父と甥の関係に当たる）の収集した資料であるということであったが、あの有名な政治家後藤新平との関わり不思議さを思うにつけても、長英の存在が後の後藤新平に与えた影響の大きさが思われ、歴史の中で一人の人間がどのよ

うに歴史の創造に関わっていくか、その不思議の一端をかいま見るような気がした。

その後、同市内にある「後藤新平記念館」も見た。「高野長英記念館」を見た後であったので、後藤新平の生きざまや、業績がより一層鮮烈なイメージをもって我々に迫ってきて、長時間を掛けてこの東北の水沢市にまでやってきて本当によかったとしみじみ思ったことである。

夜も又長英の逃亡や田原の祭りの話など長時間にわたり歴史や文化の話に花が咲き、誠に有意義であった。



研究会員 山田哲夫

華山・史学研究会だより

華山の書 1

毎月、第四土曜日の午後、続けられていた華山・史学研究会もすでに十余年を経過することになりました。これまでに、華山の紀行文や日記、記録などをほぼ一通り目を通すことができましたが、その研究成果を一同にまとめるところまでには至っておりません。しかしながら、その成果の一部を、華山会報に発表することができずことは、研究会員にとつてこの上ない喜びであると共に、責任の大きさを痛感しているところでもあります。また、毎年行われている研究視察旅行も、多くの参加者をいただき、ほぼ直接、華山の足跡を網羅して訪ねることができました。もうすでに、会報の紙面に一部ご紹介していますが、これからも直接、研究会員の目で見えた史跡について、感想を交えて掲載させていただきます。

できます。

現在、華山・史学研究会の研究活動は、華山のしるした「書」について、そのいわんとした書の意味を解説し、わかりやすく口語体にして解説しようとしています。華山の書は、書の字そのものにすばらしさがあり、書道としての鑑賞に深みがあるわけでありませんが、研究会といたしましては、その書の鑑賞を試みながら、まずは、そのいわんとしている意味について解説し、内容を理解しながら書の鑑賞を試みてみたいと考えるものであります。

平成12年度からはじめている研究資料は、「福田半香宛書簡」「椿椿山宛遺書」「薬師堂棟札解」「守字解」「耐煩之書」「田原三人様宛書簡」「自筆獄中書簡」「西銘」「東銘」「幽居記問巻」「狂歌草稿」「絵事御返事」等であります。原文は写真で見ただけ、書き下し文と口語訳を併記してその一部・内容を紹介します。

「守字解」

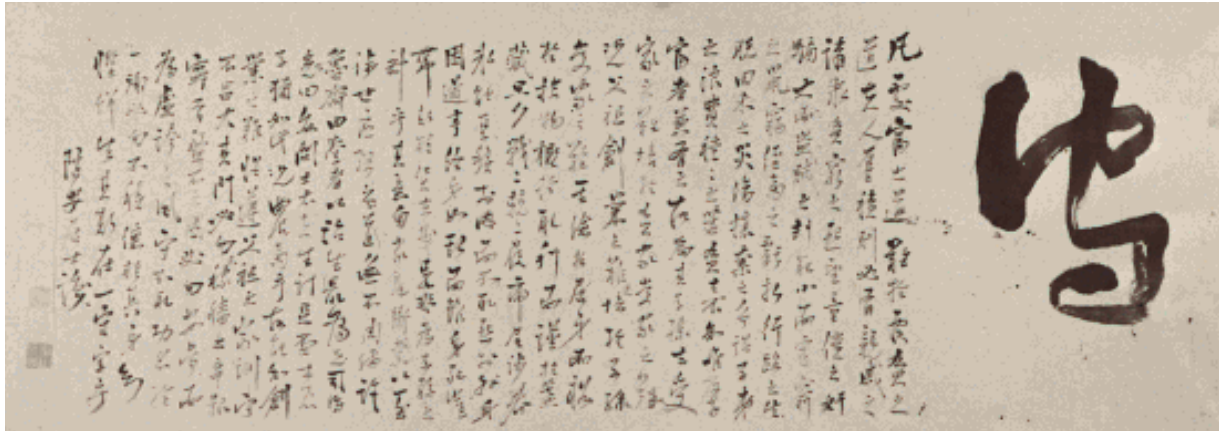
続本墨書額装 四五×一二五cm
冒頭に「守」の大字を書して、その後本文を記し、末尾に「随安居士識」とあつて「渡辺登印」の朱文方印と「華山樵者」の白文方印を捺している。

晩年田原藩塾居中の華山が、田原領内野田村の御用達林彦左衛門の求めに応じて書いたものであるが、その後漢文は読み難いとして紙本にその文の読みを付し、仮名交じりの解文を書いて与えた「守字俗解」が遺っている。終わりの随安居士は華山晩年の別号である。



「守字解」 書き下し文

およそ富に処するの道、貧に処するの道より難し。夫れ人の厚積はすなわち必ず親戚の請求、貧窮の怨望、童僕の奸騙、大にしては盜賊の劫取、小にしては穿窬の鼠窃、経商の虧折、行路の失脱、田禾の災傷、攘奪の争訟、子弟の浪費、種々の苦有り。貧者は知らず、ただ厚富は之を有する。故にその子孫となる者、その家を受くる難きは、貧家の家を受くるの難きに倍す。いわんや父祖創業の難きは、さらに子孫の家を受くるの難きに倍す。夫れ居身を儉にし、しかし接物を裕にし、取利を概え、しかして蓋蔵を謹しみ、旦夕戦々恐々、虎尾を履み、春氷を涉り、能く内に厚積し、しかして怨みを外に取らず、身困じて道亨り、終身かくのごとくして身を難じ、死して豈にこの財貨を帯びて去らんや。是れ子孫の計のためにあらずや、その意は、家庭郷党より、以て涉世応務の道に至るべく、周備



ならざる無し。許魯齋曰く、学者

は、以て治生を最も先と為す。司

馬公曰く、毎に士大夫の生計の足

や否やを問う。士君子なおかくの

如し、況や農商をや。故によく創

業の難きを知り、父祖の家訓を恪

遵し、むしろ大をその門に昌せざ

るも、必ず稼穡の辛艱を忘るな

れ。むしろ磐石の固め有るも、必

ず常に安んじて虚誇の風をなすな

かれ。むしろ功名を一郷に取らず

とも、必ず徳をその身に積まざる

なかれ。懼れを知り失を鮮くす。

それこれ一に守字に在るか。

随安居士識

「守字解」 口語訳

およそ富に対処する道は、貧に対

処する道より難しいものである。そ

れは、人間が豊かな財産を持つてい

ると、必ず、親戚がなにやかやと言

つてくるし、貧しくて生活に苦しん

でいるものたちからは、うらやまし

がられ、子供の召使いたちが悪いこ

とをしたりする。大きくいえば、強

盗が入ったり、小さくても、こそど

ろが入ったりする。行商人の損失や

世渡りの失敗、たんぼの穀類が傷つ

けられたり、盗難による争いことや

子弟の浪費など、様々な苦勞がある。

貧しい人たちは、そんなことは知

るよしもないが、ただ富者は、そん

な目に遭うことがある。故に、その

子孫となる人が、その家を相続する

難しさは、貧しい人の相続の難しさ

より倍するものである。ましてや、

父祖創業の困難さは、さらにその子

孫が相続する難しさより倍するもの

である。

そもそも日常の生活においては、

無駄を排し、人との交際を豊かにし

て、金儲けは控えめに、蓄財を謹み

常日頃から、びくびくして暮らし、

虎尾を履み、春水を涉り、しっかりと

と財産を蓄え、それでいて外からの

怨みを買わず、身をつましくして道

理を全うし、生涯、このようにして

身を慎み、死後にこの財貨を残して

ゆきたいものである。これは子孫の

繁栄の為にはなく、その本意は、

家庭、親族から、責任を果たして世

渡りをしてゆく道に、あまねく、か

なうことになる。

許魯齋がいうのには、学者は、暮ら

しの道を立てることが最優先である。

司馬公は、常に、士大夫の生計が

足や否やを問っている。

士君子もまたかくの如しである。

ましてや、農家や商家においては、い

うまでもないことである。故に、し

っかりと創業時の難しさを知り、父

祖の家訓をつつしんで守り、むしろ、

そんなに家が繁栄しなくても、必ず

農作業のつらさを忘れることのない

ようにしたい。少しばかり家の基礎

がしっかりといてても、安気になっ

て虚栄心にそまってはいけない。む

しろ村のなかで功名を高めなくて

も、必ず、徳をその一身に積まなけ

ればならない。懼れを知り、失うこ

とを少なくすることである。それも

これも、守の一字に意味するものが

ある。

随安居士識

華山・史学研究会長 渡辺巨祥

紀行文
游相日記(5)

禁制

相模

大明

- 一 軍勢甲乙人等乱暴狼
- 一 放火事

一 对寺家門前非分之

右条々若於違犯之

可被処罪科者也

天正十八年 月日

金谷山大明寺は、金谷村（相模国三浦郡金谷

村）横須賀市衣笠栄町）にある日蓮宗の寺。

天正十八年（一五九〇）、小田原の陣の時に

豊臣秀吉が出した制札を蔵している。右は、

それを写したものだ。この写しと大明寺のスケ

ッチにより、文章表記にはないが、華山が後

に大明寺に立ち寄ったことがわかる。

【百六・百七頁、両頁に互り、金谷山大明寺のスケッチ。】

清蔵と話をする。私の思っていることを話し、

清蔵の気持ちや聞く。私は安心した。（清蔵は昼

飯の時に帰る）

蘭齋が来て話した。亭主が紙を持ってきて、絵

を所望した。数枚の金を払って、また所望した。

梧庵に書かせた。

蘭齋と撫松が、厚木六勝を見に行くと誘った。これは、撫松（鐘助の事）が自ら厚木六勝を選んで、絵を求めてきた。故に、その本当の景色を見ようと誘ったのである。

六勝（六題皆連五字。余以不雅為四字）

（六題皆 五字を連ねていた。私はずれでは上品でないので、四字とした）



絵（掛茶屋の様子）

金谷村 金谷山大明寺

【百・百一頁、両頁に互って、ぎざぎざとことがつた山と、近くの丘陵を描いている。山は、大山と丹沢山をスケッチしたものである。前号掲載】

【百一・百三頁、両頁に互って、掛茶屋の板敷に三人の男が座し、ひとつの会席膳を前に話しているところと、荷物を背負った後ろ向の男一人を描いている。】

二十三日 晴

宵のうちに酔ったまま寝てしまったけれど、誰かが夜着を引っかけて枕もしてくれた。

寅の刻（午前四時）を過ぎたと思う頃、目が覚めた。

明かりの下で、昨日見聞きしたことを日記に書く。夜が白々と明けてきた。茶が出た。梅干しも出た。口をすすぎ、髪をとく。朝飯が出た。

汁 大根、味噌は白いけれど甘みは少なく、味わいが悪い、 飯 よし

平 トウフ 皿 かつを

雨降晴雪（降字下有山字）

（降の字の下に山の字があった）

飯屋喚渡（旧作飯屋戸）

（もとは飯屋戸と作った）

相河清流（旧作相模川）

（もとは相模川と作った）

菅廟驟雨（旧作菅公祠）

（もとは菅公祠と作った）

熊林暁鴉（原作熊野森）

（もとは熊野森と作った）

桐堤賞月（原桐字下有辺字）

（もとは桐の字の下に辺の字があった）

六勝をもとに、世間の名匠の詩歌を求めた。その中で、今井隆正の歌と鶯笠というものの発句はいち早くできた。みな忘れてしまったが、熊林暁鳥だけ記録しておいた。

たかまさ

ありあけの月のくまののりのかけ
きゆれはいつるむらからすかな

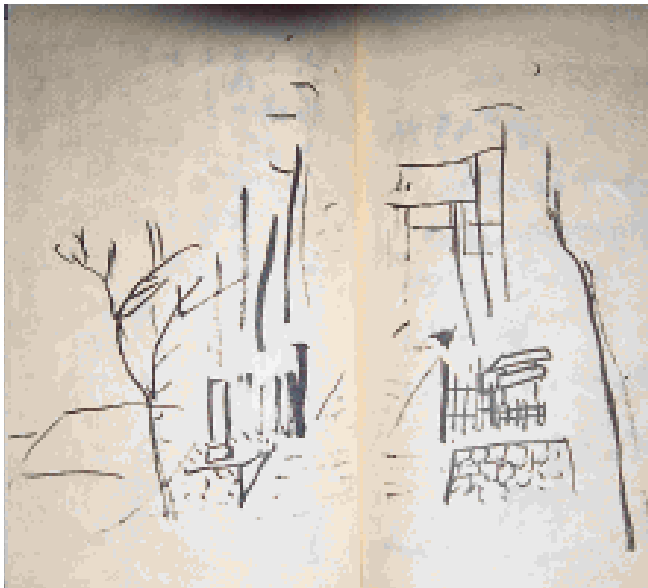
鶯笠

あけからす凧はかりのこりけり

隆正は、姓は今井、通称は将監という。もと、亀井隠岐守殿（石見国津和野藩主）の家来であったが、借金が多くなったため亡命した。親仲の時

である。書を教えて子弟を導き、隆正の時に、国学を専門として、今は八丁堀に住んでいる。岡山侯（備前岡山藩主池田斉敏）の医師井上元確の妹婿である。

隆正の先祖の親仲が亡命したように読み取れるが、『国史大辞典』によれば、隆正自身が津和野藩士であったが、故あって亡命し、後にその学識が高く評価されて臣籍に復せしめられたという。なお、姓は、はじめ今井を称していたが、中ごろは野之口、のちには大國



絵（金谷山大明寺）

を称した。

鶯笠は、一に太節と号した。その姓名を知らない。筑紫（筑前国・筑後国＝福岡県）の人という。芭蕉葉船を著した。その本は、こじつけが多くとりとめのないことばかり書かれており、おかしくてたまらない。しかし、発句は優れていると、俳句仲間が言つ。

鶯笠は、田川鳳朗といい、江戸の俳諧師。

蘭齋、撫松の二人と、桐辺堤（相模川の堤防に桐苗を植えたためこの名があるという。厚木市旭町、「キリンド橋」付近）に行った。道中、葉屋常蔵を訪れ、誘って行った。およそ、厚木の町は、長さ十八丁（一丁＝六十間、約百九メートル）。上三四丁は、大きな商店が並んでいて、たいそう賑やかである。下の方は、人の行き来もまれである。

【百十一・百十三頁、両頁にわたって、厚木の上町に並ぶ巨商の店を描いている。往還の中央に「前堀」がある】

街の終わったところに、なかなかゆつたりとした森がある。これを、熊野森（厚木市旭町）といって、この里で古くから名高い宮社である。別当は熊野堂（熊野寺、修験、明治初年廃寺、遺跡に熊野神社と歴代住職の墓がある）といって聖護

院（修験宗の本山。京都市左京区聖護院中町）の御末流で、いつの時代にこの地にやってきたかはわからない。中興の祖と言いつた人（正）中（一三三四～二六六年）、嘉暦（一三二六～二九年）の間に逝去した。古文状を最も多く伝えている。間宮庄五郎（土信）が地誌総裁職を命ぜられた時、この古文状を写すことを命ぜられたけれども、歴史の研究者が多く来て滞在するのを嫌い、わずかに五六状をお出し申し上げたのである。

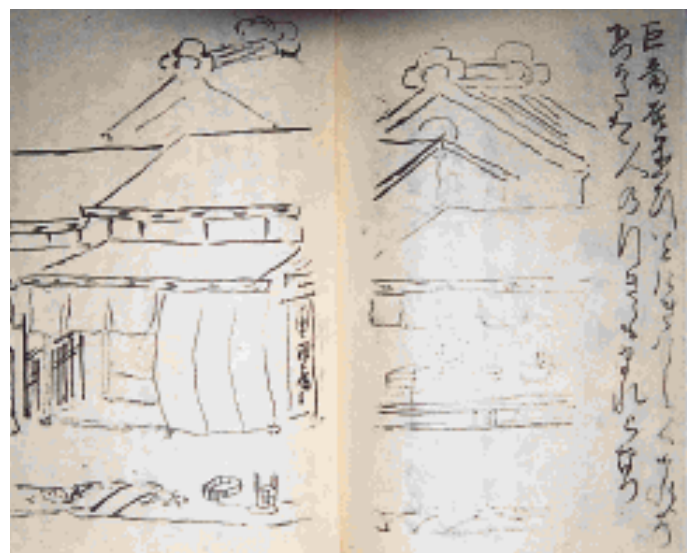
間宮庄五郎土信は、旗本で、歴史地理学者。文化七年（一八一〇）、大学頭林述斎の建議により、学問所内に地誌調所が設立されると、調方出役として出仕した。『新編武蔵風土記稿』などを完成させた後、天保元年（一八三〇）に『新編相模国風土記稿』に着手、同十二年に脱稿した。

桐辺堤というのは、長さおよそ八九丁もあるであろうか。これは文政年間（一八一八～三〇年）の築堤の時にできたものという。竹や草が生い茂って、新しく作ったようには見え、堤を境にして、右は田圃が広々と広がり、左は白絹のごとく相模川が一本の帯のように流れている。ただ鳥の行き交うのが見えるのみである。

写生をした。ここは月がよく見える所で、桐堤の宵月としたのである。ここから熊野森の全体が

見える。鳥の宿りが多いので、熊林曉鴉としたのである。雨降山もここからは手に取るように見渡され、雪景色は言葉では言い尽くせないほどである。天神様は、青い田圃の中に突き出ていて（その頃の天神様は、厚木市水引、現在の市立厚木中学校あたりにあった）、江戸の見聞（三囲神社、東京都墨田区向島にある）を彷彿させる。仮屋（仮設の小屋）というのは、川原口村（高座郡川原口村）海老名市河原口）より厚木まで至り、その間の渡り（厚木の渡りのこと。相模川を渡る矢倉沢往還の渡し場）で私が前にわたってきた所である。相模川の清流は言うまでもない。やがて写生を終わった。

知音寺という真言宗の寺院がある（明治初年廃寺、現在葬祭場、厚木市旭町）。大徳（高僧、住職の慧海）は私が尋ねて行くことを先に知っていた、茶菓子を用意して待っていた。そもそもこの寺は、いつごろに開かれたかは知らないけれど、神祖（徳川家康）の御ゆかりがあったので、忝なくも寺領を賜って、永禄年代（一五五八～七〇年）の御印状がある。書画幅、詩編の有る限りのものを出して見せてくれたが、ひとつとして注目すべき筆墨（作品）はない。ただ後水尾上皇（百八代目の天皇）の真筆と、風外（風外慧薫、曹洞宗の画僧）及び高田敬甫（狩野派の画家。名は隆久）



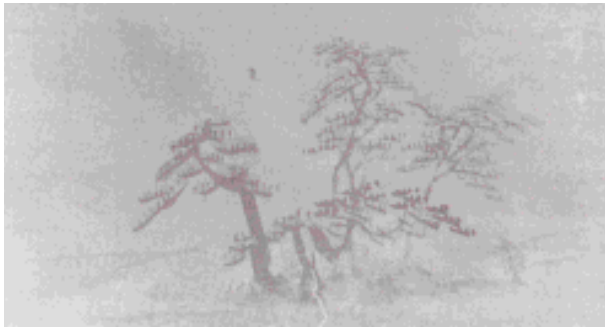
絵（厚木の巨商の店）

の書画のみである。

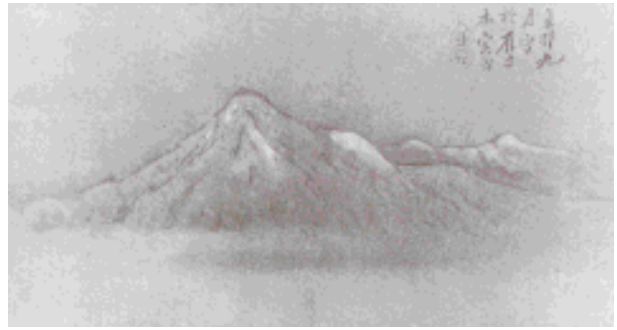
また（寺を）出て、蘭齋、撫松、常蔵が酒屋に入って、私をもてなしてくれ、熊野堂の主である坊さんを招いて、蔵の中の古文状を見せてほしいと頼んだ。この夜が明けたら、宿に持って行くと約束して帰った。

狩野洞寿（狩野家の人。画家。名は克信）の養子が、弟子ひとり連れて、私の宿に同宿していた。私の帰るのを待ち受けて酒をすすめた。これがなんと、表坊主（茶坊主。武士で、江戸城の殿

絵（厚木大勝）



菅 驛 驟 雨



雨 降 晴 雪



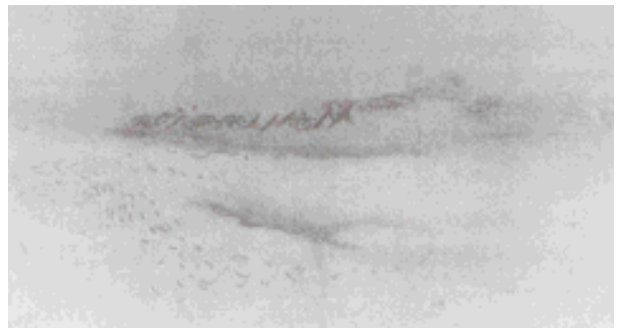
熊 林 暁 鴉



飯 屋 喚 渡



桐 堤 賞 月



相 河 清 流

中で、大名や諸役人に奉仕する剃髪者（水谷宗碩という人の子であった）。

撫松の縁者の家に病人があり、この夜、来るのが遅いと人を使つて言つてきた。また、蘭齋、常蔵、庄吉（内田屋佐吉の誤りだろう）、錦波、漁師、表具師などがやつて来て酒席の筵を敷き、歌や舞をした。

熊野堂の主が古文状を持つて来た。

玉滝房（小田原宿鎮守松原神社（小田原市本町）別当玉滝房）証文書通。これは写す。

永禄、天正年間の古状数通。

牧溪（南宋画の画僧）が描いた観音像巻幅。これも模した。

真筆とは見えないが古色なものである。

定家（藤原定家、鎌倉期の歌人）小倉の色紙。疑わしいものである。

【欄外に、「玉滝房ノ事、回国雑記ニ出（ズ）。今小田原小唄ニ、宮ノ小路ノ玉滝房ハ、親ノ代カラ玉滝房デ、親力玉滝房ナラ、子力小玉滝房ト、ソレガ出来ズハ酒ノマシヤンセ」とある】

回国雑記「東日本の名所、古寺などを遊歴した室町期の紀行。聖護院門跡道興准后著。長享元年（一四八七）成立。

（続）

研究会員 加藤克己

各地の美術館を訪ねて
山形美術館



山形県山形市大手町1-63
☎(0236)2213090
交通 JR山形駅
下車徒歩15分

山形美術館は、山形新聞・山形放送社長服部敬雄氏が中心となって財団法人を設立し、昭和39年に開館しました。その理念は、「公立美術館より一段と幅広い県民の美術館」というもので、民間主導で県と市が全面的に協力するため、財団での運営とされました。昭和43年には別館が開設され、その後、昭和59年に開館20周年記念事業として新館の建設に着工し、翌年の8月に多層民家風の3階建ての建物をオープンしました。昭和61年には別館を改修し、延べ床面積六千四百平方メートル、8展示室の合計が二千平方メートルの現在の姿になりました。

収蔵品の柱は、日本及び東洋美術郷土関係美術、フランス美術の三本で構成されています。1階の玄関を入ると、正面のロビーは「巨匠の広場」と呼ばれ、シャガール、ピカソ、ルオー、ロダンの作品が来館者を迎えてくれます。向かって右に第1展示室、左に第2展示室があり、2階の最も広い第3展示室、3階の第

5展示室と続き、これらの展示室では、企画展、巡回展や公募展を開催し、理念となつている山形県の美術文化振興に大きく貢献しています。

郷土関係では、高橋由一の「鮭図」もあります。また、2階の第3展示室の奥には「吉野石膏コレクション」があり、東京に本社を置く吉野石膏株式会社から寄託されたフランス近代絵画を見ることが出来ます。ジャン・フランソワ・ミレー、カミーユ・ピサロ、エドガー・ドガ、アルフレッド・シスレー、クロード・モネ、ピエール・オーギュスト・ルノワール、ピカソなどバルビゾン派、印象主義、キュビズム、抽象絵画、エコール・ド・パリの作家の百点以上のコレクションの中から選りすぐりの作品が常時展示されています。第3展示室から別館2階に通じる通路があり、山形市出身で近代彫刻の先駆者の一人として文展・帝展で活躍し、帝室技芸員となつた新海竹太郎とその甥で日本芸術院同人、国画会会員として活躍した新海竹蔵の作

品を展示する新海竹太郎・新海竹蔵彫刻室があります。

階下の別館1階には、長谷川コレクション記念室があります。山形銀行の長谷川吉郎前会長から寄贈された重要文化財の与謝蕪村「奥の細道図屏風」を含む長谷川家歴代収集品のコレクションに端を発し、現当主長谷川吉茂氏からの追加寄贈を加え、殖産銀行会長の長谷川吉内氏の遺志を受けた遺族憲治氏からの寄贈もあり、二つの長谷川家からなるコレクションを展示しています。このコレクションの中には、今回の華山会報の「画家・渡辺華山の心象」に取り上げられた渡辺華山の「溪澗野雉図」が含まれています。また、華山の師である谷文晁作品も数点含まれ、その中から昨年秋に田原町博物館で開催された没後160年「谷文晁展・若き日の憧憬」には、「熊野舟行図巻」が出品されたことを記憶の方も多いと思います。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌

華山と私

増山 禎之

華山と私との出会いは、小学生の頃である。教育委員会が発行していた副読本「少年物語」を読んだのが最初である。しかし、その内容は戦記物に夢中であつた私にとって、あまりにも道徳的すぎて幼心に馴染めなかつた。私の母校童浦小学校でも「華山劇」を学芸会で演じていた。主役の華山は文武に優秀な児童が演じ、私はもちろんバツクコーラスであつた。そして、中学に入学すると、中部小学校出身の友人や先生が「華山先生」と呼んでいる反発、そして自分の歴史への興味は古い時代へと移り、ますます私と華山の距離は広がるばかりであつた。もっとも、これは先入観に他ならないのであつたが。

縁あつて、私は博物館に勤務するようになった。そして日々の仕事で華山に関する問い合わせを受ける。美

術史、歴史の研究者なら納得できるが、医学、文学、考古学、生物学など他分野の方からの問い合わせがある。それは華山が描いたメモ帳「客坐掌記」類の情報に対してであつた。私はそのたび、江戸時代の記録が今日まで利用に耐えていること、これだけ広範囲の情報の記録が一人のものの手によることに驚いた。

『客参録』では、西神戸出土の銅鐸のスケッチと所見が記され、行方不明となつた今日では、貴重な記述となつている。また、足利市草雲美術館の『翎毛虫魚冊』には、田原で見た動植物のスケッチがある。これも失われた田原の自然の復元に役立つに違いない。地域研究者の先学としての華山の姿を見ることが出来る。

このように、遅まきながら私の華山への認識は、道徳の手本から、広い分野へ目を向けた優れた研究者へと移つた。そして私自身、華山が残してくれた記録を活用し、また取り組み方を学び、地域史研究を進めたいと考えるこの頃である。

田原の有名な渡辺華山先生

野田小学校

六年 林 奈津美

私が華山先生を知つたのは、二年生のころに、おじいさんが池ノ原公園に連れていってくれた時です。その時は、渡辺華山の名前と池ノ原公園で切腹したということしか知りませんでした。本を読んで、華山先生がどんな人物だったかが分かりました。

華山先生の家は、とても貧しかったので、弟や妹たちをほう公に出しました。今の時代では、とても考えられないなあと思ひました。

華山先生は、子どものころから絵が上手で、いい先生に絵を習ひました。私は、華山先生の絵を田原町博物館で見ました。とてもよく努力をしたのでしよう。すばらしい絵でした。

華山先生は、政治家としても活やくされました。四十才で田原はの家老になり、報民倉という倉を作り

ました。報民倉というのは、ききんの時に、うえて死ぬなどということがないように、あらかじめ米などの食べる物を貯めておいた所です。報民倉を作つた次の年は大ききんでした。でも、この倉のおかげで、田原はんでは、うえ死にする人がいませんでした。私は、華山先生のこの考えは、とてもすばらしいことだと思ひました。

華山先生は、学者として、蘭字を高野長英らと勉強しました。そして「慎機論」を書きました。それが幕府への批判とみられて、ばん社のごくで、つかまつてしまいました。48才で今の池ノ原公園の所に住むようになり、一年後に切腹をしました。

華山先生が、今の田原町に来たらどう思うでしょうか。私はとても喜ぶと思ひます。華山神社や、華山先生の絵が展示してある田原町博物館など、華山先生に係る所がたくさんあるからです。これも、渡辺華山先生がとてもすばらしい人であつたからだと思います。

田原町博物館から
のご案内

九月十八日～十一月四日

渡辺華山と谷文晁門下の友

(特別展示室)

十月十一日～十一月十一日

華山十哲展(企画展示室1・2)

十一月六日～十二月二十四日

華椿の系譜(特別展示室)

十一月十四日～十二月二十四日

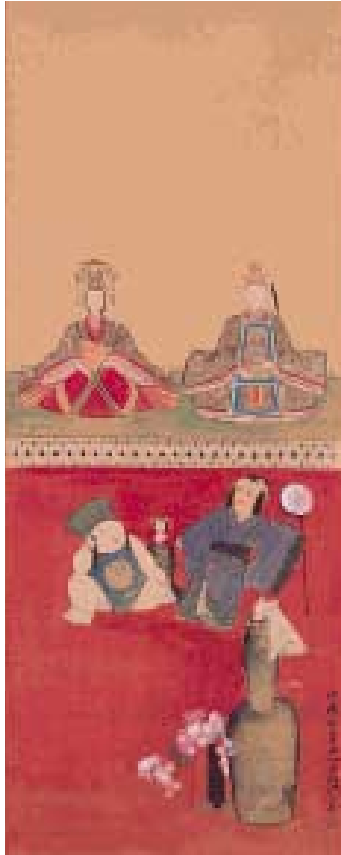
忠臣蔵の世界

(企画展示室1・2)

十二月二十六日～二月十一日

渡辺華山と弟子たち

(特別展示室)



渡辺華山筆 雜祭図

動物が語りかけるもの

(企画展示室1・2)

二月十三日～三月二十四日

華椿系の画家たち(特別展示室)

華椿系画家の学画

(企画展示室1・2)

三月二十六日～四月二十一日

谷文晁から渡辺小華まで

(特別展示室)

目で見える田原

(企画展示室1・2)

観覧料一般二〇〇円(一六〇円)

小中生一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

催しもののご案内

十月二十七日～十一月四日

菊花展

十一月三日～十一月四日

盆栽展

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所華山会館

毎月第四土曜日研究会

視察研修に参加できます。



華山会報第七号

平成一三年一〇月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

千四四一―二四二

愛知県渥美郡田原町田原巴江二の一

TEL 五三二・二三一・一七

FAX 五三二・二三一・一七

編集・協力

田原町博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 加藤克己

中神昌秀 仲井千恵

華山会報ご希望の方は華山会館・田原町博物館にお申し出ください。

次回発行予定一四年四月一日